

板野中学校 同和教育だより

MY SKY No. 20

マイ・スカイ

2001年2月6日(毎月第1・第3火曜日きまぐれ)発行

発行者

編集・文責
駐吉成正士
副次本知己

先日、^{せんじつ えき}駅のホームに落ちた人を助けようとして、^{けっきょく}結局3人とも電車にはねられるという痛ましい事故がありました。その中の一人は、^{かんこく}韓国から日本に来ていた^{りゅうがくせい}留学生だったようです。遠くふるさとを^{はな}離れ、^{いこく}異国の地で^ち見も知らぬ日本人を助けようとしての死。両親をはじめ、^{しんぞく}親族の方々も、さそかし^{むね}胸を痛めたことでしょう。日本人の一人として、^{かんしゃ}感謝と^{けい い}敬意を表したいと思います。

さてみなさん、みなさんなら同じ^{じょうきよう}状況の時、どうするでしょうか？以前「おぼれている人」の話をマイスカイに^の載せたことがありました。どんな話かというと、「おぼれている人を見つけても何もしなければ、それは何もしなかったことと同じだ」ということです。「飛び込んで助ける」もよし。「^{ただ}直ちに助けを求める」もよし。でも、「知ってたけど何もできませんでした」では……。

これは実は^{じつ}差別やいじめについても同じことが言えるように思えるのです。知ってて何の^{こうどう}行動にも移さなければ、それは差別やいじめをしたのと同じだということです。みなさんならどうしますか？そして、私ならどうすると思いますか？

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

◇「^{どうわきよういく}同和教育」から^み見えてきた^{こそだ}子育ての^{たいせつ}大切さ……でも、^{じつさい}実際はどうすればいいのか……

今、私には3才6ヶ月になる^{えりな}恵里奈と、4ヶ月になる^{こうき}見生がいます。この春から板野に引っ越してきて家族4人で暮らしています。2年くらい前から、私はできるだけ早く家に帰るようにしてきました。子どものため、家族のため、自分のためと思い……。今はだいたい夜の8時くらいに帰ることが多いのですが、それでもたまに9時くらいになることもありました。その時は本当に大変でした。何が大変かというと……。

恵里奈は、遊び^{ざか}盛《MY SKY No.20》りです。^{ひるま}昼間に^{ちから}力いっぱい遊べれば、夜もぐっすり早く寝られるのですが、赤ちゃんの見生がいるのでそういうわけにもいきません。私を除いた家族3人で、昼間に力いっぱい遊ぶわけにはいかないのです。ですから、恵里奈はどうしても私の^ま帰りが^{どお}待ち遠しかったのだと思います。帰りの^{おそ}遅いときには「とうさんおそいな

あ」と何度も繰り返していたそうです。心痛みながら早く帰るようにして、帰ってから遊ぶのですが、夕食やお風呂もあります。8時までに帰れば、なんとか早く(10時頃)寝かせられるのですが、帰りが9時頃になると、11時を過ぎても起きていることになってしまいます。

同和教育を学んでいく中で、私は「望ましい生活リズム」について学ぶことができました。子どもの将来を見据えて、小さい頃から健康的で基本的な生活習慣を身につけることが大切だということです。

でも大切さを頭では分かっているけど、実際に自分の子どもに基本的な生活習慣をつけさせるにはどうすればいいのか……これがなかなか難しくって、毎日悩んでばかりです。

先ほどの寝る時間のことで、少し前まで悪循環の繰り返しでした。

寝る時間が遅くなる⇒お腹がすく⇒夜何かを食べる⇒叱られてぐずりながら遅く寝る⇒

⇒朝起きる時間が遅くなる⇒朝食が食べられない⇒……

どこかで一つずつ断ち切っていかなないと、生活リズムがずれてしまい、いずれ健康にも害を及ぼすのだと思います。もちろんその責任は私にもあるので、「多少強引かな？」と思いつつも、「ダメなことはダメ」と理由を説明しながら話すようにしています。でも、それをやりだすと、とたんに泣き出すんですね。泣きわめいて、その場は言うことを聞かないんです。だから「分かるまでとことん」と思い、二人で居間から寒い玄関に出たこともありました。それでも私に似てヒツコイ(ねばり強い)のかどうか分かりませんが、30分くらいはずっと泣き続けていました。最後には母さんの登場で一件落着となり、本人は分かったのか、次からはしなくなるのですが……。

けど、「これで本当にいいんだろうか？」というのが実感です。3才はわがままになる年令だとも聞いています。「そんなに躍起になって叱らなくてもいいのかな？」とも思うし、「もっと適した接し方があるのかな？」とも思うのです。もちろん、自分の子どもをきっちり育てる自信なんてこれっぽっちもありません。子どもの笑顔を見れば本当に心が和むのですが、実際に親をしていくのは大変なものです。

そんなことを毎日考えるようになり、それまで自分のどこかで「生徒がこうなったのは本人や保護者の責任だ」などと、中学生やその保護者のせいにしていた部分が、スッと消えていきました。私が親になって良かったと思えるのは、そんな考え方ができるようになったことかもしれません。また、「どうせ自分もはつきりと確信を持って子育てできていないなら、他の家庭もそうかもしれない。それなら、保護者だけが全責任を負うのではなくて、子ども

に関わりのある大人^{おとな}みんなで子育てをしていけばいいんだ」と考えるようになってきています。それが受け容れられるかどうかは分かりませんが、これが今の私の「子育て奮闘^{ふんとうき}記」です。また良ければみなさんの「子育て奮闘記」「子育て奮闘記」を教えてください。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼



◆今年度も残すところ、後一ヶ月半となりました。

3年生に至っては約一ヶ月というところですかね。このマイスカイも、残すところあと3回となりました。同じく、3年生にはあと2回です。もう伝えられることといっても、たかが知れています。短い紙面に詰め込みますので、しっかり読んでくださいね!



★☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★★★ ☆☆☆

2月16日(金) 徳島県公立高等学校一般入学試験願書〆切

1・2年生基礎学力テスト⇒重要だぞ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!1!

23日(金) 2年生全体学習⇒2年生最後の全体学習。今の精一杯の勇気を振り絞ろう!

26日(月) 学習会解放子ども会(16:30～;総合センター)

28日(水)・3月1日(木) 1年生全体学習⇒最後の全体学習で、1年間を振り返ろう!

女性たちの

「生きる」闘い ③

差別を乗り越えて

(二人の闘い)

自分が部落出身であること。そのことを、彼女は、彼とのつき合いの中で話していた。だが、当時の彼には、その言葉の持つ意味が、ほとんどわからなかった。彼にとつて長い間部落差別とは、「他人事」でしかなかったのだ。

しかし、彼女と結婚しようとしたその時に、彼女を差別する両親と親戚がいた。彼女に自分の親の差別発言を鋭く指摘されるが、本当のところ彼にとっては、その差別の中身がわからない。「両親には悪気はない。言葉のあやだから気にするな」と言うのがやっとだった。

そんな彼女を彼女は締めなかった。彼女の悲しみを、傷ついた心を、そのまま彼にぶつけ続けた。

「『仮にあなたと結婚して、子どもが産まれても、子どもにもやっぱり話をしていくと思う。それなら、あなたも自分には関係ないじゃなくて、自分の問題として考えてくれんと。あなたは部落じゃなくても、あなたの子どもは部落じゃないって言われるんだから……』そんな話から始めていったんです。」

(揺れる心)

部落差別を彼と一緒に乗り越えるために、彼女は、必死で彼に話をしていた。その一方で、産まれて来る子どもが心配だった。

「この子が、もし、男の子でも女の子でも、結婚しようとした相手に、それこそ『部落だから結婚出来ん』『みたいな事言われるんだろうかとか。いろいろ考えるんです。』」

自分の本音を彼にさらけ出し、話をする。その一方で、産まれて来る子どもは、自分と同じ運命を背負うのか、という不安。彼女の心は、揺れ続けていた。

〈差別ってなんだ〉

部落差別をめぐって何度となく彼女とぶつかる度に、彼の心は変化していった。

「今はもう、ほとんどない」と思っていた部落差別に、なぜ、彼女はこだわり続けるのか。何が彼女をあそこまで追いつめていくのか。彼は考え始めたのだ。

「とにかく、言う相手は彼しくないわけですから。彼に、今私はこうなんだ。こういうふうにいる。だから悲しいんだ。そういうことを話をして。そうしたら、彼ももう、ほとんどないように見える部落差別なのに、どうして私がそこまでイヤがったり苦しんだりするのかって、疑問に思うようになったんです。少しづつ、私の気持ちを考えてようになってくれた。」

こうして二人は結婚した。それは、自分

「たちを苦しめた『結婚差別』という壁を二人で乗り越えてこぎつけた、結婚だった。彼女にとって、部落差別と闘う『家庭作りのスタートだった。』」

第三ステージ：部落差別と家族

夫との闘い

《スタートはケンカの連続だった》

結婚を契機にして、彼女は再び解放運動へと目覚めていった。夫の意識を変えることに。それが、彼女が始めた解放運動の新しいスタートになる。

「夫が『どうして、うちの子に解放奨学金を受けさせるんか。そんな生活保護みたいなものを受けんでも、そこまでせんでもいいだろう』って。ガンとして奨学金を受けすることに反対したんです。」

子どもに解放奨学金を受けさせること。このことをめぐって、彼女は夫を辛抱強く説得していった。何度も話し合った。何度も説明していった。

「『解放奨学金は、『生活保護』とは違うんよ。差別の中で教育を奪われた私ら部落の先輩たちが、闘って勝ち得た制度なんよ。だから、子どもにも奨学金を受けさせて、部落差別の意味をわからせたいんよ。』そう夫に話をしていきました。」

解放運動の中で子どもを育てたい。この彼女の思いが、夫には、なかなか伝わらなかった。運動のことを話せば、夫はうるさがつて、口論になることもしばしばあった。

「結婚しても、私ら二人には、考えにやいけんこともいっぱいあつて。最初は、すごくケンカしたから……。それがイヤで、私の育ってきた家と同じようになるのが怖くて、それなら今のうちに離婚した方がいいとかがつて、何回も考えました。」

《解放運動が私》

しかし、彼女は諦めなかった。夫は部落出身ではない。彼が、部落差別をわからないうことは当たり前。そう自分に言い聞かせて、粘り強く夫を説得していった。

「解放奨学金を受けるのも、解放子ども会に行かせるのも、夫が『ああそうなんか。やらにやいけんのか』って納得するまで受けなかつたんです。やつぱり、夫婦お互いに理解し合わない……。家庭の危機じゃないですか。ある程度、夫にわかつてもらつてからじゃないと、私一人で先走ることはいけんと思つたんです。だから、夫に對してしつこくいろいろな話をしました。」

話をする度に、夫とケンカを繰り返した。しかし、彼女は、諦めなかつた。

「もう、それこそ『あなたとは、やつてゆけん。別れる』みたいなケンカもいっぱいしたし。『これがわかつてくれんにや、解放運動が私なんだから、これがわかつてくれんかつたら、一緒に生活が出来ない』つていうところまで行きましたから。」

そうすることで、彼女は、夫の意識を少しずつ変えていった。

「もし、子どもが『あの子は部落なんじゃ』つて言われたら、あなたは、どうするんか。父親として、子どもにちゃんと説明出来るんか。なにより、子どもを部落差別から守つてやるんか、話して……。』子どもが『解放奨学金』を受け取ること。『解放子ども会』に行かせること。彼女が、これらの意味を共に理解させ納得させることに、5、6年はかかったという。

《夫の変化》

彼も悩んでいた。自分は、差別を乗り越えて彼女と結婚した。それなのに、彼女は以前にも増して部落差別を意識し始めた。自分に対して、必要に議論を挑んでくる。それが何故なのか。どうしても、彼には理解出来なかつた。

「自分は部落出身ではない。なのに、どうして自分の子どもは、部落なのか。」彼の悩みの原点は、そこにあつたという。『本人も、すごく考えてました。彼もずつと悩んでいたんです。どうして、自分の子が部落になるのか。』

そんな彼が、あることをきっかけにして、一気に変わつて行つたという。そのきっかけは、彼と子どもとの会話だった。

「ある時、子どもが、『お父ちゃん、部落って何なん。解放運動って何なん』つて、私じゃなくて、夫に聞いたんです。彼はいつも私が子どもに答えるのを覚えて、私と同じように子どもに答えて……。その時、

彼が私に不意に言つたんです。『そうか。お前と結婚したんじゃけ、わしだつて差別される時は差別されるんじゃ』つてね。」

彼女と結婚はしても、『もともと自分は部落じゃない。』彼の心の底にも、差別意識は潜んでいた。そのことを、自分の子どもと話をしたことで、彼は、自らがついていた。子どもは、部落差別から逃げられない。そして、本当は自分も、部落差別から逃げられないんだということを、子どもが気づかせてくれたのだった。

この会話を契機に、彼は急激に変わつて行つたという。

《家族と共に闘う》

このことを契機に、夫も、解放運動に参加し始めた。いろんな学習会にも、夫婦揃つて顔を出すようになっていく。

「北部地区の保育所の会合に出席した時でした。保育所の先生が『的はずれな意見を言われて、夫は怒ってるんです。』なんです、先生はわからんのか。』つて。だから、私、夫に言つたんです。『あなたと一緒に言いたいよつたじゃない』つてね。」

彼女に指摘を受けた夫は、彼女を真っ直ぐに見て、そして、笑いながらこう言つた。

「そうか、あれがわしか。ああ、なるほど。そりや、おかしいわ。」

素直な感想だった。彼女には、夫のこの言葉がうれしかった。やつと、夫にも部落

差別が見えてきた。そして、彼は今、自分と一緒に差別と闘ってつれてくる。彼女はそう確信した。

「夫は、今でもまだ、わからないことは、一杯あるみたいです。例えば、解放宣言の中に出来る『エタである』ことを誇りに思う時がきた」とかの意味で、それこそ、まだピンとこないみたいで。でも、いろんな人が解放運動をする姿を見て、部落であることが、別に恥ずかしいことでも何でもないんだという。むしろ、部落の人間は解放運動して、たくましく生きてるってことは、彼なりに理解してるみたいで。」

夫の、子どもに対する態度も変わった。長い間、締めずに話した成果が、やっとなつた感じだった。

「以前は、解放子ども会にも反対だったのに、『お父さんも解放運動するから、一緒に運動しようや』言うて、子どもに言うんです。もう、180度の変わり様でしょう。」

彼女は、うれしそうにそう語った。

結婚した当初は、差別問題の話をすれば、必ずケンカになった。彼女の差別に対する「思い」と「怒り」は、彼にはなかなか理解出来なかった。その彼が、気がつけば彼女と一緒に、解放運動をしている。夫は、子どもに何かあれば、解放運動する上で何か子どもが困ったりすることがあれば「絶対に、父さんが守ってやる。」と子どもに言い切るまでになったと言う。

「これから先も、解放運動を、子どもだけ、

大人だけで話をするんじゃないで、家族で闘っていったらいいなって。それが、私の理想なんです。」

結婚して10年。Aさんと夫との闘いは、「忍耐」と「努力」、そして限らない「情熱」によって、Aさんに、その單配があがったことはいくつもあるまい。

しかし、このAさん夫婦のような例は、極めてまれなケースでもある。

被差別部落出身の女性が、夫との関係を通して「部落差別」と闘い続けるということ。そのことは、「部落差別」が厳しければ厳しいほど、多大なエネルギーと忍耐と努力とを必要とする行為だ。「聞きたい」という思いを持つてはいても、ストリートに闘いに結びつけられない女性たちがいることも、また、事実である。

被差別部落出身のCさんの場合がそうである。

Cさん。20代。10才を頭に、4人の子もを持つ母親である。彼女にインタビュした時、正直言つて、その老けこみ様に驚いた。まだ、20代後半だというのに、彼女の健康はひどく蝕まれていた。

「今はまだ、子どもたちは小さいからいいけど。やっぱり、子どもが大きくなって、中学校とかに行くようになったら、やっぱり心配ですよね。差別とか、いじめとかもあるし。でも夫とそんな話をしたことはありません……。」

彼女の夫は、長距離の運転手をしている。

仕事が一週間以上も家に帰れないこともあるという。さらに、彼の両親とは同居。夫の両親は病気がちで、その世話も彼女の仕事の一つである。

夫は、地区外だった。「結婚する時、差別はなかった」という。しかし、本当に、彼女の回りに差別はないのだろうか。

ちよつと想像してみる。生活する上で、子どもを預かってくれる友達や、親、そして、近所の付き合いなどが、多少なりともあつても不思議ではない。が、彼女の回りには、彼女を助けてくれる人間は、全く見当たらない。彼女は、そんな人間関係からは切り離された所で、家事も育児も介護も一人きりでこなしていた。

被差別部落出身の女性が、地区外に嫁に行つた場合の、周囲からは孤立した状況が、そこにはある。まさに、孤立無援の生活状態。このこと自体が、部落差別そのものではないのか。

Cさんは、日々の生活に追いまぐられてる。そこには、彼女の夫の「支え」は見えてこない。彼女の苦悩は、「夫と闘う」以前にある。

「夫との闘い」を通して、部落差別とのさらなる闘いを切り開いていったAさん。そのAさんとは、まるで、コインの表と裏のような状況に置かれてるCさん。「部落差別」の現実をひどくくりこみ言い切ることの出来ない厳しさが、そこにはある。

次号へつづく